東北文教大学 広報誌

To Be!

VOL. 1

2017.12

見つける、叶える、なりたい自分。それが東北文教大流。

東北文教大学

東北文教大学は次のステージへ。

To the Next Stage

TOHOKU BUNKYO COLLEGE

昨年度、東北文教大学は開学6周年、東北文教大学短期大学部は開学50周年という大きな節目を迎え、その伝統と歴史を糧に新たな飛躍のステージへと踏み出しています。そこで、近年の取り組みや今後のビジョンについて、鬼武学長に語ってもらいました。

学校法人富澤学園として創立以来90年、変化する時代のニーズに対応するため、形を変えながらも、教職員が一丸となってひたすら前を向いて歩んできた、今日までの道のり。近年は「大学ランキング」(朝日新聞出版)や「大学の実力」(読売新聞社)といった全国ランキングにおいても、様々な分野で名を連ねるようになり、本学の魅力や実績が客観的な数値として示され、評価されていることを大変嬉しく、誇りに感じています。

本学の強みの一つに、開学以来一貫して行っている少人数制の教育システムがあります。教員一人あたりの学生数は10人から11人。学生一人ひとりに目が行き届き、さらに、同窓会や止宿協力会を始めとした地域の方々との強固な連携も後押しとなり、教職員が一体となって学生を入学から卒業まで手厚くサポートできる環境、すなわち、“東北文教大学学生支援ネットワーク”が整っているのです。地域に大事にされている私たちだからこそ、地域で活躍できる人材を育てて地域社会に還元していくこと、それは地方にある大学としての使命でもあります。

これまで輩出してきた卒業生は総勢16,974名。その就職先は一般企業を始め、多くが教育や保育、福祉の分野であり、これらの職種に共通することは「人の成長」に大きく関わる仕事であるということです。乳児期から学童期という子どもたちの著しい発達過程に関わる保育専門職や小学校教諭。そして、日常の介護だけでなく、時には看取りの瞬間に立ち会うこともある介護福祉専門職。高齢者は衰退期・喪失期という側面のみで扱われがちですが、人間は生まれてから亡くなるまで成長し続けるもの。人の成長に向き合う仕事に特に必要とされるのは、人間性の豊かさです。建学の精神「敬・愛・信」のもと、これからも一層、深い人間愛と豊かな人間性を兼ね備えた人材の育成を目指していきたいと思います。

急速に進む少子高齢化などの社会構造の変化やグローバル化などの時代のニーズに対応するため、本学も地域に貢献できる新たな人材養成を使命とし、常に学びの場として変革させていく必要があります。変えるべきもの、変えてはいけないものを常に見極めながら、新しい取り組みを推し進め、学生一人ひとりが輝けるように、よりよい教育、そして大学の在り方を追求していきたいと考えています。

学長 鬼武 一夫 ONITAKE KAZUO

ココがスゴイぞ！ 東北文教大学

スゴイ！ 1 「大学の実力」調査で、私立大学ベスト4

学生一人ひとりに対して、きめ細かなフォローアップ体制を整えているのが本学の大きな特色。学生の学びや生活情報を教職員全員で正確に把握・共有し、時には保護者を交えての面談を行い、学生生活の中での不安やつまずきの解消にあたります。本年7月発行の読売新聞「大学の実力2018」による私立大学552校の調査データでは、本学の**卒業率(95.1%)・正規雇用率(79.0%)**の高さ、**留年率(3.7%)・退学率(1.2%)**の低さの4つを兼ね備えた大学は、本学を含めて**4大学**しかありません。私たちの継続してきた取り組みが結実した成果です。私たちはこの成果に信念と自信を持ち、これからも努力を惜しみません。

スゴイ！ 2 徹底的な就職支援と圧倒的な就職力

本学の**正規雇用率79.0%**は、県内トップの実績。進路支援は本学が最も力を注ぐ学生支援の一つであり、進路支援センターが中心となり、学生の希望進路の実現をサポートしています。また、教員採用試験を目指す学生に対しては、県内小学校での校長経験を持つ教員が常駐する「教職実践センター」が強力にサポート。今年度の小学校教員採用試験では**15名**の合格者を輩出しましたが、最も合格者の多かった山形県では、**二次試験に進んだ10名全員が合格**という快挙を成し遂げました。

スゴイ！ 3 多様で主体的な学びを実践

一方向的な講義で知識を身につけるのではなく、学生が主体的に、自ら課題を解決できる力を養う学習方法「**アクティブラーニング**」が全国的な広がりを見せる中、本学では短期大学部も含め、実に**全体の3分の2**もの科目でフィールドワークやグループワーク、プレゼンテーションといった双方向的な学習スタイルを取り入れています。さらに、今年度はじめには、学内4箇所に**ラーニングコモンズ**の設備が完成。文献やインターネットの活用はもちろん、グループワークやディスカッションなど多様な学びの形が生まれています。

ToBe!

広報誌タイトル「TO BE!」の由来

TO BEには「やがて〜になる」の意味と「TOBE(飛べ)」という思いを込めました。
東北文教大学は「なりたい自分」を見つけ、未来に向かって羽ばたいていく皆さんを応援していきます。

TOHOKU BUNKYO

my BEST?

TOHOKU BUNKYO

東北文教大生の
イマとコレカラに
迫ります！

学業はもちろん、部活・サークル活動やボランティアなど、
何に対しても一生懸命な東北文教大生。
今回は代表して8名の在学生の〝イマ〟と〝コレカラ〟について
愛用のアイテムと共にご紹介します。

1 子ども学科／2年 土師 なぎささん
日本大学山形高等学校 出身

手作りの人形劇で子どもたちを笑顔に

児童文化部の副部長として、幼稚園や保育園の子どもたちに人形劇や手遊び、創作ダンスなどの公演を行っています。劇中の音楽や脚本は自分たちで考え、人形も手作り。子どもへの接し方や楽しませ方など、多くの学びを得ています。将来は子どもの主体性を引き出せる、元気で明るい保育士になりたいです。

PICK UP

りすの人形

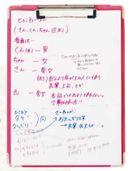
人形劇で使う人形は、子どもたちにも大好評。全て部員たちが手縫いで一つ一つ丁寧に作っています。

Toward the Dream!

2 総合文化学科／2年 菊地 亜夏音さん
高等学校卒業程度認定試験

異文化に触れることで知識と視野が広がった

留学生の学業や生活をサポートする「チューター」に応募したのは、今しかできないことに挑戦しようと思ったから。留学生に日本語を教える中で自分の知識を深め、異文化の人との交流を通して視野を広げられる面白さがあります。小さな発見だらけの毎日を楽しんでいます。



PICK UP

日本語を教えるためのメモ

担当する韓国人留学生とのコミュニケーションに使っています。徐々に「言葉の壁」が取り払われてきた気がします。

3 人間福祉学科／2年 東海林 怜奈さん
山形県立天童高等学校 出身

幅広い知識に触れられた交流授業

中学生の頃から目指している介護福祉士になるため、選択した人間福祉学科。山形歯科専門学校との交流授業は口腔の話など自分の専門外の知識を学ぶことができ、実りの多い時間でした。ここで学んだことを糧に、利用者さんの心のケアも行える介護福祉士になりたいです。

PICK UP

ピアス

ピアスは毎日欠かせないファッションアイテム。15個くらい持っていて、揺れるデザインが特にお気に入りです。

4 子ども教育学科／2年 湯澤 真さん
山形県立米沢商業高等学校 出身

子どもたちに伝えたいあたたかな助け合いの心

教師を目指すようになったのは、東日本大震災でのボランティア活動でたくさんの子どもたちと触れ合ったことがきっかけ。現在はボランティア部の一員として、ボランティア情報の収集や被災地支援の企画・運営に携わっています。助け合いの心を、子どもたちに伝えていきたいです。

PICK UP

ビブス

ボランティア活動で着用しています。9月には南三陸町を訪問し「復興市」のイベントのお手伝いをしてきました。

5 子ども教育学科／4年 遠藤 美樹さん
山形県立米沢興譲館高等学校 出身

先生や友達と勝ち取った小学校教員採用試験合格

教員採用試験の勉強を本格的に開始したのは約一年前。放課後も図書館や学生ホールで勉強する日々を続けてきました。友達と問題を出し合ったり、先生にアドバイスを受けながら、一緒に試験対策に取り組めたことが大きかったです。子どもたちに会うのが今から楽しみですね。

PICK UP

勉強道具

いつも教員採用試験の勉強に使っていたテキストには付箋がびっしり。電車の中で勉強することもありました。

6 子ども教育学科／2年 佐藤 惠美菜さん
山形県立山形北高等学校 出身

小学生と作りあげた元気いっぱいのダンス

ダンス部の部長と大学祭実行委員長、二つの立場で臨んだ大学祭。前夜祭では南山形小学校の5年生との共演による「南山形音頭『パラフレーズ』レッツダンス」を披露しました。本番までは何度も小学校を訪問し、ダンスの指導を実施。子どもたちと絆を深めることができました。

PICK UP

ネームプレート

小学校を訪問する際、毎回着用していました。子どもたちに積極的に声掛けを行い、よい雰囲気で本番を迎えられました。

Do my best!

7 総合文化学科／2年 柏倉 真子さん
九里学園高等学校 出身

勉強も部活も効率が大事 夢に向かって「卓球入魂！」

総合文化学科でビジネスに役立つ知識を学ぶ傍ら、卓球部に所属する私。これまで経験した中・高の部活動とは違い、限られた時間の中でいかに効率よく練習するかが重要と感じています。休みの日も友達を誘って練習するくらい、卓球が大好き。これからも続けていきたいです。

PICK UP

ラケットとケース

ラケット側面のサイドテープは、赤と黒の組み合わせが強そうに見えてお気に入り。ケースは中学校からの愛用品。

8 総合文化学科／2年 佐藤 みきさん
山形県立谷地高等学校 出身

江戸時代からつづく〝地域の宝〟を守りたい

民俗芸能サークルのメンバーとして、山形市谷柏地区に江戸時代から伝わる「谷柏田植踊」の復活・伝承に取り組んでいます。地域の方々との合同練習などもあり、学生だけの活動にとどまらないところが大きな魅力。尊い文化を途絶えさせないよう、練習に励む日々です。

PICK UP

源内棒

「谷柏田植踊」で前方の踊り手2人が手にする源内棒。棒を上に高く掲げる仕草などがあり、ダイナミックに踊るのがポイントです。

教員インタビュー

FOCUS

バラエティー豊かな東北文教大学の教員陣に在学生がインタビュー。その専門分野を掘り下げ、研究者としての一面にフォーカスするコーナーです。

高齢者がその人らしい最期を迎えるためのケアを学ぶ。それはとても偉大で尊いこと。

人間福祉学科 教授（学科長）
橋本 美香
HASHIMOTO MIKA

教授プロフィール
東北文教大学短期大学部 人間福祉学科教授、学科長。宮城大学大学院看護学研究科博士後期課程修了。看護学博士。社会福祉学士。山形大学医学部附属病院、特別養護老人ホーム勤務、山形県立保健医療大学看護学科 准教授などを経て、平成27年より現職。

高齢者独自のケアの重要性

江口　先生のご専門である「老年看護学」と「終末期看護学」とは何ですか?

橋本　生まれてから亡くなるまで、人のライフサイクルは8つの発達段階に分けられるのですが、老年期とはその最終段階に位置づけられる時期のことです。その中でも、近い将来の死が不可避となった状態のことを終末期と呼びます。高齢者の身体はいったん機能が低下すると回復が難しく、急激な状態変化につながる場合も少なくないため、成人とは異なる看護が必要とされます。高齢者の日常生活の質を確保し、最終的にはその方にとって望ましい〝看取り〟を実現する。そうした一連のケアの在り方を考える学問分野になります。

江口　どのようなきっかけで学ぶようになったのですか?

橋本　医療技術が発達していなかった昔は自宅で死を自然に受け入れ、家族で見送るのが一般的なことでした。ところが医療が進歩するにつれ老衰という自然の成り行きに逆らい、死を先延ばしするようになったのです。私が介護施設で働いていた当時は、施設で高齢者を看取るということに関して明確なガイドラインがまだ整備されておらず、病院における延命優先の終末期医療をそのまま転用しているのが実情でした。老衰による死が近づいている人に対して無理な延命を行うことに大きな疑問を抱き、施設に入居する高齢者には独自の視点でのケアが必要だと強く感じたことがきっかけです。

誰もが向き合うべきテーマ

江口　私たちのように、介護福祉の仕事を目指す人に習得が必要な知識なのでしょうか?

橋本　死についてきちんと考えることが、その死に向かって自分がどのように生きていくかの道しるべをつくることに繋がります。そうした意味では、介護福祉に関わる人に限らず誰にとっても身近であり、若く健康なうちから向き合っておくべきテーマだと思います。

江口　確かにそうですね。最後に、先生はこの学問のどんなところに意義ややりがいを見出してきましたか?

橋本　一つは、高齢者が自らの人生に満足して幕を閉じることができるかどうかが、ケアの担い手に委ねられているという職責の大きさがあります。さらに、高齢者の最も身近な存在として日々想いを汲み取り、その人に寄り添うというケアスタッフの姿勢はとても尊いものです。ですから若い人にも介護福祉の仕事のやりがいに目を向け、高齢者ケアや終末期ケアについても深く知ってもらいたいと願っています。

私がインタビューしました!

人間福祉学科／2年
江口 亜優美さん
（山形県立山形北高等学校 出身）

NOTICE BOARD

東北文教大学からのお知らせや、最新の話題をお届けします。

AWARD 齋藤由美子特任准教授、『山形県男女共同参画社会づくり功労者等知事表彰』を受賞。

左から3人目が齋藤由美子特任准教授

短期大学部の齋藤由美子特任准教授が、平成29年度『山形県男女共同参画社会づくり功労者等知事表彰』の功労者表彰を受賞し、10月15日に遊学館で表彰式が行われました。この表彰は、多年にわたり男女共同参画社会づくりに特に顕著な功績のあった個人・団体を称え、山形県知事より顕彰されるものです。齋藤特任准教授は平成13年4月の県男女共同参画センター設置当初から、職員として「チェリア塾」をはじめ同センターの事業に中核的に携わり、平成23年から本学短期大学部で一貫して男女共同参画に関する研究を行い、学生への指導にあたっています。また県等が主催する男女共同参画に関する各種講座・講習会等でも数多くの講演を行い、本県の男女共同参画の推進に大きく貢献してきました。

AWARD 加藤大鶴（だいかく）准教授、『小荷駄のみどり出版文化賞』を受賞。

短期大学部の加藤大鶴准教授の『南山形ことば調査報告書』（東北文教大学地域連携・ボランティアセンター 2016年3月発行）が『第11回小荷駄のみどり出版文化賞』を受賞しました。同報告書は、本学のある南山形地域で語られている方言、また、かつては語られていた方言について、住人への聞き取り等のフィールドワークを通してまとめたもので、地元方言の変遷や現状を考察した貴重な資料として評価されました。6月10日には山形市立図書館で授賞式が行われ、続いて受賞記念講演として加藤准教授による市民講座「方言の継承と誕生―南山形のフィールドワークから―」が併催されました。

REPORT 児童教育研究センター公開講座（小学校英語）を開催。

平成29年度児童教育研究センター公開講座「小学校英語」―小学校教育における外国語活動―を、5月10日、6月21日の2回にわたって開催しました。第1回目は「外国語活動―今できること―」と題して、子ども教育学科の山口常夫教授による講義が、第2回目は「クラスルームイングリッシュとアクティビティ」と題して、短期大学部総合文化学科のサイモン・リーヴス准教授と山口教授のワークショップがあり、サイモン・リーヴス准教授より、クラスルームイングリッシュやフォニックス等、実際の授業で使えるアクティビティの紹介があり、参加者と一緒に実践しました。2回の講座を通して参加者からは、「自分の語彙力をもう少し高めていく努力をすること、デジタル音声もできるだけ使っていくことなど、大切にしていくべきポイントがわかってよかった」「ゲームあり、クイズあり、劇あり・・・。次回の外国語活動の授業でどう使おうか楽しみになりました」などの感想が寄せられました。

REPORT 民話研究センター公開講座を開催。

平成29年度民話研究センター公開講座は、9月30日に本学附属図書館2階で行われ約60名の方の参加がありました。今回は、「山形の民話伝承活動―伝える営み、語る愉しみ―」と題して、前半は、帯刀春男さん「田川民話の会の活動」と萩野勝さん「まほろば語り部の会の活動」の二つの報告のあと、参加者との活発な意見交換がありました。民話を地域の方々や次世代の人たちにどのように伝えていくのか、また民話を語る魅力とは何か、様々な意見が出され、これからの伝承の方法を考える機会となりました。後半は、「語りの交流会」として、個性豊かな5人の語り手さんによる民話語りに聴き入ることができました。

社会ではばたく
To Be! 力（りょく）

出会いに恵まれた大学時代。恐れず挑戦することで拓いたアナウンサーの道。

YAMANOUCHI CHIKAKO

山内 智香子さん

フリーアナウンサー

短大卒業と同時に、フリーアナウンサーとしての活動をスタート。現在はラジオ番組のパーソナリティーやサッカーJ2モンテディオ山形のスタジアムDJを務めるほか、イベントMCやナレーションなどを担当しています。

この仕事の一番の魅力は、様々な分野の人と出会えること。また情報だけでなく、声に想いをのせて伝えられることです。高校で放送部に所属していたこともあり、アナウンサーという職業は選択肢の一つでしたが、当時最も惹かれていたのは英語に関わる仕事でした。現在の道に進んだのは、短大2年の冬から開催された「べにばな国体」で開閉会式の式典アナウンサーを務めたことがきっかけでした。

山形での47年に一度の貴重な機会。「せっかくこの場所にいるのだから挑戦したい」と、式典アナウンサーへの応募を決意しました。後に正式採用が決まり、本格的な研修がスタート。同時に様々なイベントの司会なども経験させていただき、次第に「話す世界」への関心を深めていきました。在学中の活動でしたが、先生方や仲間から全面的に応援していただけたことが励みになりました。

また短大時代、先輩や先生方の紹介により出会いが広がり、自分から行動を起こし続けたことで道を切り拓くことができました。一時は東京の大学への憧れもありましたが、重要なのは都会か地方かの選択ではなく「自分がいる場所でどれだけ自分らしく輝けるか」ということ。そのためにも後輩のみなさんには様々な挑戦や経験を通し、自分の引き出しを増やしてほしいと思います。

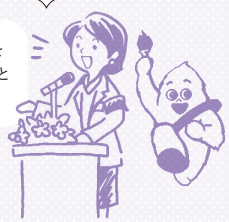
私のHISTORY

プロフィール
1971年生まれ。山形城北女子高等学校（現 山形城北高等学校）出身。平成4年山形女子短期大学（現 東北文教大学短期大学部）英文科卒業。同年からフリーアナウンサーとして活動する。

1年次
英語に興味があり積極的に海外研修等に参加

2年次 冬
べにばな国体の式典アナウンサーを務める

ここがターニングPoint!
話す世界に目を向けるきっかけとなりました



社会人1年目
フリーアナウンサーとしての活動を開始。はじめて自分のラジオ番組を持つ

20代中頃
「自分にしかできないこと」を模索。モンテディオ山形の仕事に関わりはじめる

現在
フリーアナウンサーとして幅広いジャンルで活躍中

To Be! 発行月：2017年12月（年2回発行） 発行：学校法人富澤学園 東北文教大学 入試広報センター 〒990-2316山形県山形市片谷地515 TEL：023-688-2296 URL：http://www.t-bunkyo.ac.jp